

梵文「法華經」に現れる空という用語

西 康 友

「空」の思想は、原始仏教以来、もともと知られている思想の1つであった。しかし、原始仏教（釈尊入滅後100年ころまでの仏教）においても、初期大乘經典（西暦紀元前後-200年ころまでの仏教）の中の1つである、梵文「法華經」（以下、SPという。）においても中心的な思想ではない。初期大乘經典が多く存在するそのなかで、「空」の思想は、特に般若經群において重要視され、龍樹（Nāgārjuna, 150-250年ころ）の著作とされる『大智度論』『中論』で展開し、般若經系統における重要な根本思想の1つとなっている。「空」とは、「もろもろの事物は因縁（原因と条件）によって生じたものであって、固定的実体がないということ。縁起（相互関係）しているということ」（中村元『佛教語大辞典』、1975年、pp.278-279、（ ）内は著者が付け加えた。）という意味である。

初期大乘經典の中で、最初のものでされる「般若經」の成立が西暦前後であり、編纂地域が南インドであると「般若經」自身に説かれている。また、「法華經」の成立が西暦150年ころで、編纂地域が今は失われた地方である、ガンダーラあたりと推定されている。この2つのことは研究者によって、説がさまざまに異なっており、いまだ研究が盛んであるが、いずれにしても「法華經」が「般若經」の影響を受けているであろうと考察してみると、「空」という用語がSPの成立過程、およびその思想の解明の手がかりの1つとなり得るのではないかということ、ここで提示したい。

では、SPに、どのように「空」の用語が用いられているのであろうか。以下に、私のSPにおける試訳を通して検証する。（SPの底本として、H.Kern and B.Nanjio(ed): *Saddharmapuṇḍarīka, Bibliotheca Buddhica X*, St. Pétersbourg, 1908-12を用いた。）SPに見られる「空」（śūnya）の用語が現れるすべての箇所に着目すると、以下の3つに分類できる。それは、(1)「空」だけを用いている用例、(2)「空」を用い、前後にその内容を説明している用例、(3)「空」を用いずに、譬喩によって「空」の内容を説明している用例である。(1)では、ただ「空」（śūnya）という用語を用いるだけで、その意味するところを説明せずに、「空であることを私は感じて」、「あらゆるものが空であって」など、「空」の教えを実践することが随処に強調され、素朴に「空」の用語だけを用いている。(2)では、「生じない」、「変化せず」、「ありのままの状態」などといった、「空」の用語が前後に同格の用語とともに用いられ、「空」

の内容を説明しており、かなり論理的な表現となっている。このような用例は、第13章 Sukhavihāra 第19偈までしか現れず、不思議なことに、それ以降に「空」の用語が見出されない。(3)では、直接「空」という用語を用いず、「滅することや生じることから離れている」と表現され、(2)の用例で挙げた、「空」の内容の説明と同じ表現で、譬喩的に「空」の内容を説明している。しかも、このような用例はこの1つだけしかない。

以上のことから、(1)では、原始仏教における「空」に近いと思われ、SPでは「空」の用語が、第3章 Aupamyā 第12偈になって初めて用いられている。よってSPが段階的に成立したと仮定すると、原始仏教における「空」の影響を受けているのは、第2章 Upāyakaśālyā ~ 第5章 Oṣadhi（鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』では、「妙法蓮華經方便品第二」~「妙法蓮華經藥草論品第五」におよそ対応する。）の前半までであり、SPの最初期の成立と思われる。また、(2)では、般若經群の中でも初期の成立とされる『八千頌般若經』のように、論理的に「空」が説明されることに近いと考えられ、SPでは第5章 Oṣadhi 第81偈以降に、「空」の内容が論理的に表現されている。よって、SPが般若經群の「空」の影響を受けているのは、第5章 Oṣadhiの後半~第13章 Sukhavihāra（『妙法蓮華經安樂行品第十四』）の前半までであり、SPの最初期の成立のあとの成立と思われる。さらに(3)については、SPには第4章 Adhimukti においてのみ現れている。この「空」の譬喩的な表現が、SPの成立にどのように関連しているかは、今後の研究課題としたい。

以上は、「空」の用語だけに着目し、1つの用語だけに限って論じ、SPの成立過程についての1つの手がかりを見出そうとしたわけである。しかし、「法華經」には一乗思想をはじめとする重要な思想が多くあるため、これからも研究に研鑽していかなければならないのは、言うまでもない。また、仏教經典がどのような人々によって保持され、どのような地域で流布し、どのように生活の中で取り入れられたのかなど、多くのことを明らかにしていきたいと思う。

このように、思想的研究をするとき、文献学的考察に基づく研究が必要不可欠であり、文献学的研究をする際にも、思想的研究に立脚してはじめて、多くのことが明らかになってくると信じる。

（中央学術研究所）